

小牧聖徳教授退任記念論文集の刊行にさいして

経済学部長 松野 昭二

小牧聖徳先生は1990年3月末日をもって、定年により立命館大学教授の職を退かれます。小牧先生は1949年4月経済学部助手に就任されて以後じつに40年間に余る長期間にわたり、経済学部において研究教育に専念されてきました。立命館経済学会は、この間の先生の多大の御功績を回顧し、また称揚するための一つとして、ここに誠にささやかながらご退任記念論文集を『立命館経済学』に特集することになりました。

小牧先生は1924年京都府に生れられました。第2次世界大戦のアジア戦線が本格化する1937年の4月、立命館商業学校に入学されて以降、立命館大学予科を経て、1948年3月立命館大学経済学部を卒業されるまで、その青少年期のほとんどを立命館学園で過ごされました。そして、1948年4月から1年間京都市立醍醐中学校で教鞭をとられた後、翌年4月には経済学部助手に就任されたのでありますから、戦中・戦後をとおして50年余の間、立命館で学び、研究教育に従事され後輩を育て上げられた「立命館のひと」の名にふさわしい方であります。

小牧先生は経済学部助手に就任以来、主として、故武藤守一教授（元総長）の厳しい指導と暖かい助言の下で、金融論・銀行論を専攻されました。当時の先生の研究業績の一端は「カールメンガーの貨幣理論」（『法と経済』117・118号、1951年12月）、「特殊的生産について—資本論における保管費運輸費の検討—」（『立命館経済学』第1巻第2号、1952年4月）及び「利子生み資本の変容—近代銀行業の成立をめぐって—」（『立命館経済学』第2巻第4号、1953年8月）等々にみることが出来ます。御研究の進展につれて、先生は1951年4月経済学部専任講師となられ、1955年1月経済学部助教授となられ、ついで1964年10月から現在

まで経済学部教授として、研究と教育に専念されてきました。この間、小牧ゼミで学び集立ったOBは数百或は千をもって教える程にも達しております。

40年間に余る先生の研究的営為、その足跡は主要著作目録に一見して明らかのように、大きく二つの系列に分けることができます。その一つは『銀行論（経済教程）』（1953年、玄文社）にはじまり、『銀行資本の基本問題—その本質と現象—』（1963年、雄渾社）を経て、『銀行資本発展の理論』（1971年4月、ミネルヴァ書房）、『増補 銀行資本発展の理論』（1974年12月、ミネルヴァ書房）にいたるものであり、他の一つは『金融要説』（1966年8月、雄渾社）にはじまり、『現代金融要論—現代金融の基本問題—』（1974年12月、雄渾社）、『金融経済の理論—銀行・金融・経済の関連と展開—』（1979年9月、雄渾社）を経て、『改訂現代金融要論』（1983年9月、雄渾社）にいたるものであります。

研究的営為において着実でありました小牧先生は大学・学部運営においても堅実そのものであります。1975年4月から1年間、立命館大学一般教育センター委員長として、一般教育改革のための議論を領導され、1980年4月から81年9月まで経済学部長・経済学研究科長の重責を担われました。経済学部教授会は先生の研究御業績と大学・学部運営でのご功績に対して名誉教授の称号を贈呈することで些かなりとも報いたいと考えております。

1989年12月20日、以学館12号教室において、小牧先生は「経済学新造語とわたし」と題する退任記念講義を平素の口調そのままに行われ、現職教授としての講義を完結されました。先生が経済学部を去られるいま、「会者定離」は世の習いとはいえ、惜別の念誠に断ちがたいものがあります。しかし幸にも、御健康にめぐまれ研究意欲旺盛な先生は、定年退職後も中京地方の某大学で専任教授として教鞭をとられるとのことでありますし、また講師として経済学部のゼミや講義を御担当頂くことになっておりますから、先生のお教えを受ける機会はなおあるわけであります。

小牧聖徳先生の益々の御健勝と御精進を祈念申し上げて、惜別の言葉を終わりたいと思います。

1990年2月